

藤森立男先生の急逝を悼む

古屋 健（立正大学心理学部）

平成 27 年 1 月 4 日、本学会の常任理事である藤森立男先生が心臓病のため急逝されました。昭和 29 年生まれ、60 歳、あまりにも早く、またあまりにも突然の旅立ちでした。

かえりみれば藤森氏と私とは、早稲田の大学院以来、かれこれ 35 年以上のつきあいになります。橋本仁志早稲田大学（元）教授門下の学友として、特に年齢の近い湯田彰夫氏（現・信州大学教授）を加えたわれわれ 3 人は、お互いに刺激し合い、励まし合う仲でした。当時の藤森氏の研究テーマは対人魅力で、やがてリーダーシップの問題へと関心を広げようとしていた頃です。

3 人の中ではいち早く専任の職を得て函館（北海道教育大学）に赴任した藤森氏でしたが、平成 5 年 7 月 12 日、運命を変える出来事が起こりました。北海道南西沖地震です。交通網が復旧するのも待ちきれずに奥尻島入りした氏はその惨状を目の当たりにし、それ以降、心理学者としてできる最大限の努力を被災者支援のために注ぐことになります。しばらく間は、ボーナスのほとんどを被災地との往復にかかる旅費につぎ込んでしまったという話も聞いています。しかし、着実に成果は実っていました。その時の活動をもとに作成された『災害を体験した子どもたち—危機介入ハンドブック』（1995）（藤森和美氏との共著）は、阪神・淡路大震災の際にも教育関係者に提供され、大きな役割を果たしました。それから今日にいたるまでの、この分野における氏の活躍については、多くの方の知るところです。そして平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こります。奇しくも福島県立双葉高等学校 OB である藤森氏の出身地は、福島第一原子力発電所事故による避難指示が出され、やがて警戒区域として未だに帰ることを許されない場所となってしまいました。災害心理学の第一人者自らが災害によって故郷を喪失するという被災者の立場に立つことになったのです。その時も、氏は時間があれば避難場所につけつけ、被災者の慰労に奮闘したことは言うまでもありません。

平成 26 年 4 月、私の所属する立正大学心理学部では、災害心理学と経営心理学の専門家として藤森氏を教授にお招きすることができました。さっそく、東日本大震災被災者のその後の精神健康にかかわる共同研究プロジェクトが立ち上がりました。私もその末席に加えていただき久しぶりに一緒に仕事をする機会を得て、とにかく感心させられたのは氏のフットワークの軽さです。時間があれば被災地を訪れ、先方の了解があればすぐにでも会いに行く、迅速にして機敏な活動能力とそれを支えるエネルギーと熱意には頭が下がる思いでした。体力の衰えを実感するようになっていた私は、わずかに年長者であった氏の活躍ぶりを見て、大いに元気づけられたものです。

このように、新天地での教育と研究に意欲をもってとりかかった矢先のこのたびの突然のできごとでした。私を含め多くの関係者が驚き、その不在の影の大きさに呆然とし、そして深い悲しみの中にあります。

あらためてここに氏のこれまでのご経歴と業績を振り返り、その志の高さに最大の敬意を捧げるとともに、心からの哀悼の意を表します。

■藤森先生略歴

- 昭和 50 年 4 月 学習院大学文学部心理学科入学（昭和 54 年 3 月 同 卒業）
- 昭和 54 年 4 月 早稲田大学文学研究科博士前期課程心理学専攻入学（昭和 56 年 3 月 同 修了）
- 昭和 56 年 4 月 早稲田大学文学研究科博士後期課程心理学専攻入学（平成元年 3 月 同単位取得退学）
- 平成 元年 3 月 北海道教育大学教育学部 講師（平成 3 年 10 月 同 助教授）
- 平成 7 年 4 月 横浜国立大学経営学部 助教授（平成 12 年 4 月 同 教授）



藤森立男先生

平成 14 年 4 月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院 教授
 平成 26 年 4 月 立正大学心理学部対人・社会心理学科 教授

■応用心理学会での活動

平成 10 年 平成 10 年度日本応用心理学会 奨励賞
 平成 12 年 日本応用心理学会監事（平成 21 年まで）
 平成 21 年 日本応用心理学会常任理事（企画委員長）（現在まで）
 平成 23 年 平成 23 年度日本応用心理学会 優秀大会発表賞
 平成 24 年 平成 24 年度日本応用心理学会 学会賞（論文部門）

■主要編著書

平成 24 年 『復興と支援の災害心理学—大震災から「なに」を学ぶか—』 福村出版
 平成 22 年 『人間関係の心理パースペクティブ』 誠信書房
 平成 22 年 『産業・組織心理学—変革のパースペクティブ—』 福村出版
 平成 7 年 『心のケアと災害心理学』 芸文社
 平成 7 年 『経営心理学トピックス 100』 誠信書房

■主要論文

- 2012 Recurring natural disasters and PTSD among survivors. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 38, 68-75.
- 2011 繰り返される自然災害と被災者の長期的な精神健康の問題—2000 年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神傾向について— 応用心理学研究, 36, 69-78. (共著)
- 2009 Pressing social problems in present Japan and workable solutions. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 34, 99-116. (共著)
- 1998 長期化する精神健康の問題と自然災害—北海道南西沖地震の被災者— 性格心理学研究, 7, 11-12.
- 1996 北海道南西沖地震による被災者の精神健康に関する研究 精神科診断学, 7, 65-76.
- 1992 組織の公式構造がキャリアと業績に及ぼす効果 心理学研究, 63, 273-276.
- 1989 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, 4, 108-116.
- 1980 態度の類似性, 話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 20, 35-43.



立正大学心理学部公開講座にて
 (2014 年 10 月 11 日撮影)